

# 王維の「世に入る」と「世を出る」をめぐって

——青年期の詩作から——

孫 佩 霞

まえおき

人類の文明史は、外的な物質界と内的な精神界の真実に関する、人類の飽くなく探求の長いプロセスであると言えよう。その過程で、自然科学の諸領域の他に、哲学、宗教、文学、心理学、政治学など人文科学の数多くの領域が形成され、様々な次元から、人類の自己探究のプロセス、そしてたどり着いた認識を記録してきた。この探求は文明自体の始まりであるとともに、時代と地域を超えて途切れることなく持続され、進行し続けている。無論、文学もそうした中の、人々が最も親しみやすい領域の1つである。偉大な文学作品は、時空を超えて読者の深い共鳴と持続的な思索を呼び起こし、外的や内的な省察を促してくれる。

以下の詩を例に挙げよう。

中歳頗好道、晚家南山陲。興來每獨往、勝事空自知。行到水窮處、坐看雲起時。偶然值林叟、談笑無還期。（終南別業）

この詩を目にしたとき、詩人が中年に頗る好きだという「道」や、南山の「家」、心の中の「興」、目の中の「勝事」の内容について、想像力を馳せることもできれば、水の流れに沿って独りさまよい、

流の果てまで歩き、そこで心穏やかに執着なく足を止めて腰を下ろし、目線を地上から山の上に移し、白い雲が生まれていくのを見るという、束縛のない悠然とした気持ちを感じとることもできる。外的変化とその受容、そして近くから遠くへの広がりが見え、徹底的な自然の写実であると同時に、どこまでも抽象的であり、無限の余韻を醸し出している。このような「心」の無執着な自由さと無限な広がりは、千年の時を超えて、依然として、「物我無碍、人物交融、一処染常淨、其樂無窮」という禪の境地への我々の憧れを、この上なくかき立てるものである。

これは古今に亘って最も人々の称賛を集めた王維の詩作の一つである。こうした写実と思弁性の渾然一体こそが、王維の詩の世界の独特な魅力であり、今日なお読者と研究者を惹きつけてやまない。また、王維の「官吏でありながら隠居である」生活——中国文化の枠内で言うと、「儒、道、仏」の三つの価値体系の完璧な融合であるかのように見える——は、現代社会の中で心身ともに疲れ果ててしまった我々にとっても、理想的な生き方に思われる。しかし、果たして事実はいかなるものか。「儒、道、仏」は王維の生活の中で、日和見主義的に「時」に応じて取捨選択されたのか。あるいは初め

から選択があり、生涯を通して貫かれたのか。小論では主にこのテーマについて検討していきたい。

王維について、すでに先達たちの豊富な研究成果があり、筆者のような後学が多くの視点から学び、考えることを可能にしている。中でも、日本の入谷仙介、丸山茂、中国の范淑文、譚朝炎をはじめとする大家たちの研究は、特に筆者にとって有益なものであった。小論はこれらの先行研究に基づき、詩人の人生の前半の生活と詩作を主に取り上げ、双方を照らし合わせ、この時期の詩人の内面の変化の過程とその詩作の特徴の関連を分析し、「官であり隠である」という王維の生涯の特徴、すなわち彼にとっての「世に入る」とことと「世から出る」ことの意味について考察を行う。

王維の生涯は全体的に、「エリートコース」を歩んだと言える。王維は青年期より文才で頭角を現し、その後、比較的順調な人生の軌道を進み続けた。彼は十九歳にして科擧の郷試で首席合格者となり、二十一歳時には、科擧の最終試験に合格して進士及第になり、正式に官吏の道を歩み始めた。ほどなくして黄色い獅子を礼法に反して舞った咎で済州に左遷され、四年後に又淇州に左遷されたが、間もなく官を捨て淇上に隠居し、開元十七年(729年)に長安に戻って修道の時期を過ごした。開元二十三年(735年)、張九齡の推薦で右拾遺に任ぜられ、その後、河西の節度史、殿中侍御史を歴任し、嶺南赴任、終南山隱遁などを経た後に、再び政界に出て左補闕に任命された(以上は「王維詩全集」による)<sup>(1)</sup>。キャリア上の浮き沈みをいくつか経験したとは言え、五十四歳の晩年に「安史の乱」に遭遇して囚われの身となり、やむを得ず安祿山側の官職に就くまでは、「官であり隠である」という比較的に穏やかな人生を送ったと言える。

る。まさにそうした間に、彼は優れた詩を大量に生み出し、当時の文壇の重鎮になったと同時に、「詩仏」として不朽な名声を後の世に残した。

その後、上で触れたように、「安史の乱」という極限状況が発生し、王維の生命が直接的に脅かされ、同時に彼の朝廷官僚としての政治的節操が真剣に問われることになった。王維の選択は「志を曲げて身を守る」であった。私達はどのように王維の「不節操」を理解すべきか。王維の大量の詩作から、彼が生命の本質及び人生の意味について考える際によりどころとする価値体系、つまり中国の伝統文化の中の「儒、道、仏」という多元価値観の存在が見てとれる。

しかし、注意しなくてはならないのは、「儒、道、仏」の三者はもともと異なる思想体系であり、それらの間に共通点もあるとは言え、認識方法と前提となる世界観においては、根本的な違いがある。そのため、この三つの異なる思想体系について調べ、王維が具体的な人生の課題に取り組む際に、そのいずれを特に重視したか見極める必要がある。彼はどのように取捨選択して自らの心を落ち着かせたのか。そして、彼の取捨選択を規定した要因とは何か。

現存する王維の作品の全体から見て、異なる時期の詩にはそれぞれ大きく異なる特徴がありながら、同時に一貫した鮮明な共通点があることに気が付く。例えば、彼の初期の詩作には、現実的な生活の題材を詠んだ作品が多く、しかし中年期になると山水自然を詠む詩が比較的に多くなる。人生の最後の時期となると、以前の「淡泊さ」と「穏やかさ」、そして自然の景物に融け込ませた禪の味わいが減少し、やや無理を感じさせる俗世間の「賑やかさ」や、長編に渡って「仏理を説く」ことをテーマとした作品が増えた。こうした

顕著な特徴は何を意味するのか。現実をテーマに吟詠することは直ちに儒教的価値観を反映すると言えるのか。王維の精神世界は、果たして定説となった儒学を経て道と仏に至るという過程をたどったのか。これらの問題についてもう少し検討する必要があると思われる。

ここで、王維の詩作に込められた思い及び自らの内面についての省察を分析し、この「詩仏」と尊ばれている唐代の偉大な詩人の実にアプロロチしていききたい。この試みにより、古代中国文人の精神世界の深層を再認識すると同時に、やはり人生について真摯に考え、悩む今日の我々のために、意義あるヒントが得られるかもしれない。なんとと言っても、「生命の本質とは何か」「人間はいかにして生きるべきか」は、今日においても我々を悩ませ続けている、根本的な問いであるから。

王維について、先人達はすでに様々な観点から大量の研究を行い、各自の見解を得るに至ったが、検討の余地がなお残されているように思われる。例えば、王維の思想の多元性について、譚朝炎氏は「紅塵仏道覺輞川」という著書の中で、王維が生きた唐という時代の「三教合一」の文化的背景及び仏教を篤く信仰する家庭の文化的な影響を総合し、緻密な分析を行った。筆者もそれらの背景の重要性を強く認めるが、しかし、各創作時期における王維の思想の偏重点の解釈、特に王維の世界観を「儒から仏、道に至る」とする観点について、疑問の余地があると思われる。

上で挙げた中日の学者の先行研究を参照し、ここで王維の人生を青年期——三十三歳以前、成人期——三十四歳～五十四歳の「安史乱」で囚われの身となるまで、晩年期——恩赦されて官職に復帰し、

臨終に至るまで、という三つの時期に大まかに分ける。このような区分の理由は以下である。すなわち、三十三歳以前の王維の経歴は、今日の言い方を借りれば、「文学青年」が初めて世間に出る際に普遍的に経験する、いくつかの浮き沈みを経験した。三十四歳からは、張九齡に見いだされ体制の上層部に這い上がった比較的に順調な発展期であった。「安史の乱」で挫折を経験するまでのその期間、いくつかの職務上の変化を経験したものの、全体的に彼の生活は豊かで、キャリアは安定し、社会的文化的エリートとしての成功路線——つまり文学的才能によって、衣食の心配のない上流文化人という安泰な地位を獲得する道を歩み続けた。いわゆる晩年期において生命にかかわる一大災難——「安史の乱」で囚われの身となり降伏した（五十四歳）——を経験したことは、王維のキャリアにおいて拭い去ることのできない汚点となった。皇帝の赦しを得たとは言え、王維はその約五年後にこの世を去ったことも、ひょっとすると内心の重荷と無関係ではないかもしれない。紙幅の制限のため、小論は主に王維の青年期を取り上げ、（１）儒教思想に対する王維の態度、（２）世俗的成功を求める王維の内面（３）王維の詩における「自然」の本質と、三つのテーマについて探っていききたい。

## 1 儒教思想に対する王維の態度

前で触れたように、「儒、道、仏」の思想は王維の詩作全体を貫いている。しかし、これらの思想は、異なる時期の作品の中に反映される様子について丁寧に分析していく必要がある。この問題について、中日の学者はすでに大量の研究を行ってきた。一般的に、王維の一生は、「儒学から仏・道へと至る転換の過程」（日本語訳と下

線は筆者による、以下も同）であり、張九齡が左遷された後から、王維の政治的情熱が減る一方、「仏・道の思想は徐々に増大」していったと言われている（前掲「王維詩全集」前書きP2）。譚朝炎氏も前掲の「紅塵仏道覺輞川」の中で、王維が「青年期の積極的に世に入る時期、そして中年期の世に入る部分と世から出る部分を兼ね備えた時期」及び「老年期に精神的ふるさとの破滅のため、超然とした世から出た状態から、世俗的な悩みと煩わしさに墜落した」という思想の軌跡をたどった（同「紅塵仏道覺輞川」P11を参照）とみている。譚氏は「前期の現実的な題材の詩歌」——岐王の宴會に陪席して詠んだ詩、友人を泣く詩、及び「洛陽女兒行」「息夫人」と辺塞詩など——を根拠に、「王維の現実的な題材の詩」は、「儒教的礼法を越えずに、あるいは実際の景色を描写し、あるいは歴史を詠むことによって、気持ちを表現している。抑制が効いており、芸術的奥深も兼ね備えている」とし、王維の現実を題材にした詩は儒教的「興、觀、群、怨の美学的思想」を体現し、「儒教の美学的詩教育精神に貫かれ」、「人の心を浄化し、その精神的境地を高める」（同上P30を参照）と主張している。

上述の観点について、筆者は疑問を抱かざるを得ない。まず、「人の心を浄化し、その精神的境地を高める」ことは、すべての優秀な芸術作品が普遍的に追求している境地であり、必ずしも背後に儒教の美学的詩教育精神が存在する必要があると考えられる。次に、時代の弊害を訴え、風刺と比喻によって遠回しに教化し、君主への愛と忠誠心と人民を救い助ける志を表現する「政教一致」こそがいわゆる「儒学的美学思想」の中核であり、この中核を取り除けば、もはや「儒教の美学的思想」とは言えないのではないかという疑問が

ある。さらに、もし王維の現実的な題材と山水題材の詩が、「審美的觀照をした後の第二の現実」であり、それゆえ「儒教的興、觀、群、怨の美学的思想を体現する」ならば、審美的觀照と濾過を経ない「第一の現実」の芸術創作も存在するというのだろうか。自然と山水を題材にした作品に限定しても、李白の奔放さ、杜甫の重みのある壮大さ、蘇東坡の壮麗さ、辛棄疾の勇ましさ、そして王維の優雅な淡泊さも含めて、それらはすべて詩人の生まれつきの氣質の違いによって現れた個人的な特徴であって、必ずしも儒教的いわゆる「智なる者仁なる者」の「山を楽しむ水を楽しむ」という倫理的意味で説明を行う必要はないと思われる。第1章の最後に譚氏も認めているように、人の世の流転を広い自然と対応または対比させて、思いを表現し、イメージの世界を作り上げすることは、「詩人が普遍的に使う手法」である。しかし譚氏はやはり、王維の山水田園詩に見られる思弁性を、「儒教的美学的觀念から離れ、道家と禪の美学的境地をますます顯著に表現するようになった」（同上P32～P36。日本語訳は筆者による）と結論付けている。つまり、「紅塵仏道覺輞川」でも同様に、王維の思想を儒教から徐々に仏・道へと転換したとしている。

本当にそうであるか。儒教思想が個人と社会の関係を取り扱う立場は、『三つの『立てる』』——「徳を立てる（つまり儒教的道德の模範となる）、功を立てる（世のため国のための業績を残す）、言を立てる（書を著し道義を説き、後の世に伝える）」——及び、「窮すればすなわち独り我が身を善くし、達すればすなわち兼ねて天下を善くす」という二箇条に要約できる。では、これから王維の最も初期の作品までさかのぼり、その内面的変化を追跡するでしょう。

王維の最も早期の詩作を見ると、確かに儒教・仏道・道教の三種類の思想が同時に作品中に現れ、特に現実的な題材の集中する青年期の作品は、後の山水田園詩と違い、王維と大自然の対話ではなく、王維と古今の人物の「偉業」との対話であり、世俗的な暮らしについての思考であると見て取れる。これらの作品を詳しく分析すると、王維がこのような「功を立てて業績を残した古人及び自身または知人友人の政治参加——すなわち「世に入る」ということ——について抱く態度を垣間見ることができ、王維の思想が果たして本当に始めは儒教的で、後に徐々に仏・道へと転向したかについて考える際の、手がかりが得られる。なお、小論で引用する作品の原文はすべて前出の「王維詩全集」によるものである。

もし開元二十三年（735年）、王維が張九齡の推薦で右拾遺に就任したことを境にするなら、それ以前の詩作は約76首ある。これらの詩作の多くは、儒教的意味の「世に入る」をテーマとしないが、しかし、行間に作者の儒教思想に対する独特な態度が滲み出ている。例えば、現存する一番早期の詩作「秦の始皇が墓を過ぐ」は、王維の十五歳の作であるとされているが（本文に取り上げた王維の作品の成立時期は全て前掲の『王維詩全集』による）、前半四行で墓の豪華絢爛さを描写し、後半四行「海有れど人は寧ろ渡らん 春無ければ雁は廻らず 更に松韻の切なるを聞けば 疑わる 是れ大夫の哀しめるかと」が表す「功を立てる」こと——ここでは一つの時代を築いた帝業の消滅——に対する無常感をますます引き立たせる。このような態度は、蘇軾が二十二歳時に書いた「白帝廟」の中で、三国時代に公孫述に王として独立し、天下の争奪に参加するよう進言した荊郡を大々的に賞賛した<sup>(3)</sup>ことと、極めて対照的である。別の

例として、王維が十九歳の時に書いた「李陵を詠む」がある。前半12行では、「3代続く将の門の子」李陵の超人的な武勇さを惜しみなく賛美し、続いて敗戦する原因は「既に大軍の援を失」ったことだと明言し、かつ敵側に降参した「恥を受け」たのも、実は「深衷欲有報」——後日の機会を伺い報国しようという深い気持ちがあったからだ、「祖国を裏切つて敵に降伏」した李陵への深い同情を表している。この作品は後世において「やるせなさを書き表し、鬼神をも涙させるのに足る」と評されている（前出「王維詩全集」P12を参照）。この二首の詩は、直接表現されてはいないものの、丁寧に読み解けば以下のことが自ずと見えってくる。すなわち、儒教的な「功を立てる」人生観、ないし「君に忠をつくす」思想について、青年王維はすでにある程度冷めた目で見ている。二十一歳の詩作「燕支行」では、全編で極力「漢家の天将」の勇猛無敵さを描写しているが、しかし、「交戦須令赴湯火、終知上將先伐謀」——「孫子・謀攻」の「故に上兵は謀をもつて伐とし、其に次ぐ伐は交なり、其の次は兵をもつて伐つ、其の下は城を攻む、城を攻むるの法は已むを得ざるが為なり」——こそが点晴の筆であり、「功を立てる」——ここでは手柄を立てるために大いに殺戮する——ことについての距離を置いた態度を反映している。唯一、四首一組の「少年行」だけが、功を立てて世に残すことに奮い立つ少年の情熱を詠んでいる。しかしこれらの少年も結局のところ、王維が傍観する少年で、王維が河西にいた頃（開元25年（737年）前後）に制作した「隴頭吟」に登場する、夜に守備の望楼に登って、気持ちがはやる少年と同じ種類の存在である。一方、同じく「隴頭吟」に登場する百戦を経験しても諸侯に縁がなく、「馬を駐め之を聴き双涙が流れる」という

「関西の老将」も、そして「節旄空尽海西头——漢王朝への忠誠を守り、北漢に十九年囚われの身」にして、やっと漢王朝に帰ることができたが、「才爲典属国——微小の官吏にしかならなかった」蘇武も、戦場で手柄を立てたく血が騒ぐ少年の激情とは、鮮明な対比をなす。王維の早期の詩の中に見られるこのような儒教的「功を立てて業績を残す」ことへの、距離を置いた冷めた態度は、後に軍隊を慰問するために辺塞に赴いた際に書き残した数少ない辺塞詩に見られる態度とは、本質的に一致する。「老将行」のような一見士気を鼓舞する詩に見える作品でも、丁寧に読み解けば、行間からはやはり、「功を立てて業績を残す」ことの悲しさが滲み出ている——詩の主人公である「老将」は、少年の頃より勇敢に戦い、度々奇跡的な手柄を立ててきたが、しかし老齢になっても褒賞にあずかることなく、貧困の中で老衰していく。そうした中においても、心の中では依然として「功を立てて業績を残す」機会を得ることを渴望している——これはほとんど「功を立てて業績を残す」という儒教的人生観を解体しているに近い。このような距離を置いた、傍観的な「曲折」した心境は、儒教的「功績」に触れる彼の詩では、常態になっている。

その上、辺境に赴いた期間に書かれた数首以外、そのようなテーマを扱った作品はその後の詩作の中に見られなくなった。

以上より、王維は青年期より、儒教的「国のため世のため」に「功を立てて業績を残す」という人生観に対して距離をおいた、冷めた態度で見ていたと言える。王維の精神的世界のこのような独特さは、中国古代のその他の多くの文人とは明らかに異なっている。古代の文人官僚の内面は、往々にして、政治的情熱に満ちた段階から挫折

を受けて失望ないし絶望するに変わるという変化の過程を辿っていたのである。儒教思想に対して持つこの距離感は、王維の「温厚」な性格によるものとも言いがたい。というのは、同じく性格が穏やかでかつ最終的に「道、仏」に精神の安住の地を見出した白居易は、初めて政界に足を踏み入れた時はやはり極めて強い政治的情熱を示し、かつ実際に行動で表した——そのために「職務を超えて事を説いた」という僭越の罪で江州に左遷されたほどである。文学創作をとっても、白居易が政界に入った初期に、奸佞な官吏に齒きしりさせ、権力者を怖がらせ、そして今日も依然と人々に親しまれている一連の諷諭詩を書いた。それらの作品こそが、儒教的「兼濟」という理念、及び「興、観、群、怨」によって政治を改善するという文学観の積極的な実践に他ならない。

王維が儒教的「功を立てて業績を残し」理念に対して鼓舞と賛美を表したことは、当時のメインストリートの価値観の下で生き延びるための、やむを得ない行動とも解釈できる。というのも、儒学思想を時代の支配的価値観とする古代の専制社会では、体制の中で官職を得て生活の糧を手に入れた文人ならだれでも、そうした価値観を吹聴せざるを得ない。しかし、大きな声で吹聴する者でさえ、必ずしもその価値観の根っからの信奉者とは限らない。従って王維の詩作に見られる慎重かつ距離を置いた表現は、むしろ儒教が彼自身の確たる価値観ではなかっただろうと思われる。ついでに、敬虔な仏教徒として、「嘘を言わない」ことも王維の厳守すべき戒律の一つであった。

それでは、王維の生涯における官途の持続をどう理解できるか。以下で、同じく彼の早期の詩作からその手掛かりを探る。

## 2 世俗的成功を求める王維の内面

青年期に書かれた現実的な題材の詩の中で、上述のように「他人」の功績と名声に対する感慨以外にも、王維自身の政界に身を置いている気持ち、及び古人を借りて社会的成功に対する自身の態度を述べているものがある。「済州に出さる」は作者が20歳の時に太楽丞に着任して間もなく、規定に反して黄色い獅子を舞った罪で済州司倉に左遷され、軍隊に入って赴任した時の作品である。この詩は王維が直接自分の政治生活を詠んだ作品である。全詩は以下の通りである、

微官易得罪、謫去済川陰。執政方持法、明君無此心。閭閻河潤上、井邑海雲深。縦有帰来日、多愁年鬢侵。

古人のこの詩に対する見解は参考に値する（前出「王維詩全集」P30）。清の黄生は「唐詩摘抄」中ですでに指摘した―第一、二行では、自分が「本当に有罪であるわけではない」という憤りだけではなく、官位が卑しく後ろ盾のない者が危険に満ちた政界で経験する浮き沈みに対する感慨でもある。三、四句目は「風刺が実に深く――「政を執る」や「法を執る」といった公明正大な語を用いながら、「明君此の心無からん」と、高官の権力濫用を憤る。五、六行では左遷される悲愴な気持ちを述べ、七、八行では行く先見えな不安感と憂いを表現している。

済州に行く途中に綴られた「宿鄭州」という別の詩の中で、無念さを胸中に抱えた王維は、相変わらず卑しい官職に赴任しにいく自分をこのように慰めている――「此去欲何言、窮辺徇微禄」このたった二行で、二十歳の王維はすでに生計を立てるための無力感とキヤ

リアを厭う気持ちを表している。そうした無力感と厭う気持ちは、単に官位の低さと挫折によるものではないと思われる。済州の任を離れ西に帰る際に綴られた「寒食汜上作」の中で記されたのも、喜びではなく、「歸客淚巾を沾す」であり、「落花寂寂」とした晩春であり、山鳥のまばらな鳴き音の中の孤独であり、「楊柳青青」の感傷であり、「水を渡る人」の憂いである。男らしい功績を立てる野心ではなく、人生の「愛別離」の苦しみの方が常に、王維の共感をより誘うものであったことが、それらの詩から窺える。そのため「別れを観る者」の中で、他人の家の「愛子」との別れを目にした時「行かずば養う可き無く 行き去らば百の憂い新なり」という人生の苦しみは、「窮辺徇微禄」のためにすでに長らく家から離れていた王維も思わず涙したのである。

王維は後に、直接的にまたは婉曲に推薦を求め、最終的に高い官職に着いたが、しかし、結局のところ、それは功績を残し儒教的「兼ねて天下を救済する」という人生観を実現したためではなく、家族への愛と生計を立てるためである。同じ理由で、官位を捨て去る陶淵明の気骨に対して、王維は賛成しない。次に取り上げる「偶然作六首」のうちの一首では、彼は直接に陶淵明に対して「生事曾て問はず 肯へて家中の婦に愧ず」と問いただしている。

淇上の小さな官職についた期間（727年、王維二十六歳）に綴られた「偶然作六首」は同時に、官吏として業績を残すという価値観自体に対するの王維の疑問をも鮮明に表している。

〈其の一〉は次の通りである。

楚国有狂夫、茫然無心思。散髮不冠帶、行歌南陌上。孔丘与之言、仁義莫能獎。未嘗肯問天、何事須擊壤？復笑采薇人、胡為

乃長往！

この詩の中「狂夫」の、「孔孟を軽んじる一方、夷齊をも笑ひ、屈原にもなりたくない」（『王維詩全集』P 60）という態度は、王維の憧憬する態度であり、儒教的価値観を完全に超越し、自由で何ものにも束縛されない生き方である。

〈其の二〉はというと、農閑期に「酒を闘い隣を呼」び、茅葺きの軒下で一人の田舎老人の啖呵である——「五帝与三皇、古来称天子。干戈将揖讓、畢竟何者是？得意苟為樂、野田安足鄙？且當放懷去、行行沒餘齒」。ここでもやはり、田舎老人の口を借りて儒教的功績の実体のなさを述べている。

〈其の三〉は、詩人が俗世間の網に囚われ続けている理由を明白に述べている——「小妹日成長、兄弟未有娶。家貧禄既薄、儲蓄非有素」のため、「愛染日已薄、禪寂日已固」という詩人自身を「凡回欲奮飛、踟躕復相顧」というようにさせている。

〈其の四〉は上で触れたように、直接陶淵明の「官を捨て」て「酒に耽る」生き方は、家族に対する恥すべき無責任なわがままであり、「生事曾て問はず」がために家族を貧困に陥れながら、密かに他人の救済を期待する——「儻しも送る人有りや否やと」——という尊厳のない恒常的な貧困状態は、「郷里の小児に腰を折る」屈辱よりもさらに恥すべきことであると批判している。

〈其の五〉は賢才が貧困で出口が見つからない一方、享樂にしか能のない輩が高い地位に着いている現実を批判するもので、儒教的「兼ねて救済する」という理想に対する不信任感を反映している。

〈其の六〉は王維の晩年の作品とされている。同時に、王維の精神世界を理解する上できわめて重要な手がかりである。この詩の中

で、王維は自らの本性を確認し、自分の詩才さえも否定して、自分は「宿世詞客に謬らる、前身応に画師なるべし」と述べている。

現存する王維の作品より、彼の詩作への情熱が十分に現れて取れる。「詩の中に画あり」という彼の作風からは、天才的な画家が持つべきユニークな審美眼をも十分に示している。しかしそこには、「功を立てて業績を残す」ことへの情熱だけは見られない。上述の分析により、官吏になる道を歩むことは王維にとって、終始家族的責任感によるやむを得ない選択であったと言える。推薦を求めて張九齡に書いた「上張令公」と「獻始興公」という二作の中からさえ、王維の政界の現実に対する冷静さとやむを得ない心境が窺える。儒教的「独善」と「兼濟」の人生観は、一度も王維の精神世界で主要な地位を占めたことがないと言わざるを得ない。それゆえ、「儒学から仏・道に入った」という説は妥当とは言えない。

では、どのような人生観が王維の思想と人生を終始貫いていたか。続いて、同じく王維の青年期の詩作を手がかりに、この問題を探りたい。

### 3 王維の詩における「自然」の本質

「世に入る」という儒教思想に対して距離を置いているという、前述の王維の特徴は、詩作の結びの部分で視点を反転させた感慨を述べ、詩全体の真意を明らかにするという手法にも表れている。前出の「燕支行」「洛陽女児行」「隴頭吟」「老将行」などがその例で、前半の煌びやかな描写は最後で一挙に風刺と化し、解体される。それらとは対照的に、自然の山水や田園をテーマにした詩作では、初期から、自然の描写に内面と外面が渾然一体となった調和の美が常



に見られ、自然への惜しみのない賛美にあふれている。こうした特徴は彼の晩年の作品まで一貫して存在する。

まず筆頭に上がるのは十九歳の時、開元七年（719年）に書かれた「桃源行」である。紙面に限りがあるため、ここで原詩を省略する。この詩の超絶的な美しさに関して、かねてから多くの賛辞が寄せられているが、一言でまとめると、この作品は桃源郷を詠んだ古今の作品の中の「最高峰」とされている。しかし、ここで強調したいのは、王維の「桃源郷」に住んでいるのは神通力を持つ「仙人」ではなく、「漢の名前」と「秦の服」をした自然人で、「仙源」や「靈境」を描写する全ての美しい詩句は結局、「俗世間」の煩惱から離れ、かつ二度とそれに煩わされる危険のない自然な田園の描写である。しかし、これこそが、王維が発見、描写し、かつ酔いしれた「最高峰」にして完全無欠な境地である。無論、王維が描写した「自然」の「完璧さ」はただ人を喜ばせるだけのものではない。むしろ、それは彼の内面の世界を完全に象徴する、もしくは彼の内面の扉を開くことができるがために、詩人の苦楽を全て包容できる、優しく広大な存在である。それゆえ、権勢のある高官達と交際する時も、王維が描写する「自然」はむしろその場の風景の写実であった。例として、「從岐王夜宴衛家山池應教」における自然描写「澗花輕粉色、山月少燈光。積翠紗窗暗、飛泉繡戶涼」や、「敕借岐王九成宮避暑應教」の中の「隔窗雲霧生衣上、卷幔山泉入鏡中。林下水聲喧笑語、岩間樹色隱房櫺」などが挙げられる。見逃してはならないのは、応酬のための作品であっても、詩句に描かれた自然の事物は美しく真実味があり、権力者に媚びへつらうためのねつ造ではない。気分が沈み込んだ時も同様、「自然」は王維にとって、重荷を下ろさせ、

慰めと啓示を与えてくれるものであった。例えば、罪をかぶって済州に赴く途中で、河北の城楼に登り遠くを眺めた時、視野が「高城」、「極浦」、「夕日」、「蒼山」、「寂寥とした天地」の広大さに及び、詩人の心もゆたたりと流れる「広川」のように、平靜かつどこまでも広がるようになった。失意のさなかでさえ、自然な田園生活は詩人の目には、依然として「桃源郷」と同様な完全無欠さを備えたものとして映っている。「田父草際歸、村童雨中牧。主人東皋上、時稼繞茅屋。蟲思機杼鳴、雀喧禾黍熟」——「宿鄭州」（721年）。現実を題材にした彼の初期の全ての詩において、こうした特徴が顕著に見られる。「早入榮陽界」「千塔主人」「渡河到清河作」などが例として挙げられる。初期の詩で「隱遁」あるいは「道」、「仏」に言及した作品では、すでに若き詩人の心底からの憧れがより明白に吐露されている。次に挙げる「濟州過趙叟家宴」がその例である、

雖與人境接、閉門成隱居。道言莊叟事、儒行魯人餘。深巷斜暉靜、閑門高柳疏。荷鋤修藥鋪、散帙曝農書。上客搖芳翰、中廚饋野蔬。夫君第高飲、景晏出林園。

このような「人の世」にありながら、ひたすら老荘の道を考え、俗世間に煩わされずに書を著すという、格調高くかつ質素な隱遁生活は、弱冠二十歳の少年の心の中で、すでに人生の理想的な状態になっている。輞川別業の一連の詩作は言うに及ばず、後に僧侶や道士の友人達と直接に交わした詩作、および自身の隱遁生活を描写する詩作において、彼は浮世を離れた「隱遁生活」で体得した、心の静まり返った、広大な広がりを感じさせる自在さを余すことなく表現している。

以上より、儒教的「齊家、治國、平天下」の人生観は青年期の王

維の人生の理想にはならなかった——その後もついにすることはなく、逆に彼は青年期より自然の中から「曠然銷人憂」という体験を得ており、俗世間を離れた「世から出」た生活に熱烈にあこがれたことが窺える。人生の早い時期からこうした内面の特徴を示したのは、やはり彼の仏教信仰が原因であると思われる。仏教を篤く信仰する母親が、彼の世界観に最初にして最も深遠な影響を残した可能性が大きい。また、王維の生きた時代は禪宗の盛んな時期で、禪宗の思想の中では、「真心」一元論——「真如縁起」論は、世界の根源、宇宙の実体を「真如」とし、そこからこの世のすべてが派生（縁起）したとしている。人為的に手を加えられていない状況下で万物が示す「自然無碍」の状態が、すなわち仏理の顕現である。つまり「青翠竹、尽是法身；郁郁黄花、無非般若」ということである。大自らの「無造作」な無垢な美と無限さは、政界で人々が戦わせる「計算高い心」、「塵のような考え」、そして「桶妻」のようにほかない「朝露の身」とは、比較にならないほどの境地の相違を形成している——この点は老莊思想とも共通している。詩人が大自然の中で体験し認識したのは仏理の奥深さで、もちろん老莊の世界観でもあり、名声と利益を競う俗世間という場の下劣さに対して当然軽蔑ないし嫌悪を抱かざるを得ない。そのため、王維の詩の世界において、「俗世間」や「人間的営み」が極度に回避されていることも理解できる。注意すべき点は、自然と調和した生活は忌み嫌う対象には含まれず、王維の目にはむしろ、大自然に囲まれた田舎の生活は、穏やかで、質素で、無造作なものに映っている、

「日隱桑柘外、河明閭井間。牧童望村去、獵犬隨人還」（淇上即事田園）

「萋萋芳草春綠、落落長松夏寒。牛羊自歸村巷、童稚不識衣冠」  
（田園樂七首）其四

以上より、大自然は王維にとって、初めから仏教的世界観の体现であった——ひよっとすると老莊的世界観の要素もあつたかもしれない。大自然の美について、初期の詩作の中ではまだ後期のような鮮やかでずば抜けた表現が見られないが、しかし、初期の詩作の美学的意識はすでに儒教的なそれとは異なり、より広大な世界観を反映したものである。このような反映は詩人の若さのため、まだあまり深いとは言えないが、しかし詩作の中にすでに詩人の人生観と世界観の方向づけが鮮明に投影されていることを、認めないわけにはいかない。

### 結び 王維の「世を出る」をめぐる

王維は最終的に自ら追い求めてきた「無執着」な禪の境地に達したのだろうか。その後期の作品を見る限り、答えは「否」であると思われる。確かに、その輞川集の二十首において、自然のイメージの中に分ちがたく含まれていながら痕跡を残さない、感嘆すべき「禪の境地」があり、後代の人にはとても望めないような審美的高みに達してはいた。しかし結局、このような境地は「官であり隠である」生活にあつて、衣食の心配がなくなかつ日常生活が無事に流れる時期の境地であり、いかなる情況下においても「無執着」でいられる徹底的な悟りの境地ではない。さらに、晩年の詩には、以前のような、自然と禪が渾然一体となった「法悦」に近いような、広がりのある静謐さがあまり見られなくなった。もちろん、仏教が王維の心の最終的な帰着く先になったことは疑いの余地がない。彼は

「晩年長齋、不衣文彩。……齋中無所有、唯茶鑑、藥臼、經案、繩床而已。退朝之後、焚香獨坐、以禪頌為事。」<sup>(4)</sup>と言われている。逆に、晩年に見られる長編の仏理を論説する詩作は、直接に仏理の論説をテーマとしており、青年期より王維に見られる俗世間の超越を目指す傾向は、人生の洗礼を経験した後の晩年において、しっかりと彼の人生観と世界観となったことが窺える。一方当時のメインストリームの価値観である儒教思想は、青年期の懐疑を経て、晩年期の無関心に至るといって、変化の過程をたどった。

注(1) 「王維詩全集」張勇編著 崇文処局 2017年1月前書P11、P2

(2) 「紅塵仏道覺軀川」譚朝炎著 中社会科学出版社 2004年第六章

(3) 「蘇軾詩詞文選評」王水照、朱剛撰 上海古籍出版社 2011年12月P6を参照

(4) 「唐才子伝校箋」傅璇琮 主編 中華書局出版 2002年P300を参照

## 参考文献

「詩人の視線と聴覚——王維と陸游——入谷仙介 研文出版 2011年

『唐代の文化と詩人の心——白楽天を中心に—— 附篇「王維の自己意識」

丸山茂 汲古書院 2010年

「漱石の題画詩にみる画趣——王維の『輞川集』と比較しながら」范淑文（比較社會文化叢書XIII）、『異文化を超えて——アジアにおける日本』

再考』東英寿 秋吉收（編）花書院出版 2011年

「王維の自閉的志向」内田誠一『中国古典文学論集』（松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集刊行会 研文出版 2006年

## 受贈雑誌(三)

現代日本語研究

大阪大学大学院文学研究科日本

語学講座現代日本語学研究室

高知大國文

高知大学国語国文学会

語学文学

北海道教育大学語学文学会

國學院雑誌

國學院大學

國學院大学大学院文学研究科

國學院大学大学院文学研究科科学

論集

生会

国語学研究

東北大学大学院文学研究「国語学

研究」刊行会

国語問題協議会

國語國字

愛知教育大学国語国文学研究室

國語國文學報

北海道大学国文学会

國語國文研究

安田女子大学日本文学会

国語国文学

福井大学

国語と教育

大阪教育大学国語教育学会

国語と教育

長崎大学国語国文学会

國文學

関西大学国文学会

國文學

早稲田大学国文学会

国文学研究

国文学研究資料館

国文学研究資料館紀要

神戸大学「研究ノート」の会

国文学研究ノート

広島大学国語国文学会

國文學攷